

総目次

2021年(第1号～第6号)

[表示は、題名、著者名、(号)掲載ページ]

特集

第1号

量的研究、質的研究の 「危うさ」と混合研究法の 可能性

(企画:『看護研究』編集室)

第6回日本混合研究法学会オープンフォーラム「混合研究法で量的研究、質的研究の「危うさ」を乗り越えられるか」より

【量的研究の立場から】

計量的言語研究の現状と展望——検証型研究と探索型研究の界面。石川慎一郎／抱井尚子。(1) 10-17.

【質的研究の立場から】

質的研究の危うさ——私の経験から。グレッグ美鈴／抱井尚子。(1) 18-24.

【パネルディスカッション】

量的研究・質的研究の課題と展望、そして混合研究法の未来。石川慎一郎、グレッグ美鈴、成田慶一、抱井尚子。(1) 26-35.

第2号

看護における 混合研究法の進展

(企画:『看護研究』編集室)

看護研究者のための混合研究法——eラーニングシステムの構築とその意義。抱井尚子。(2) 94-100.

混合研究法の教育および学習に関する先行研究の概観——包括的な文献レビューに基づいて。高木亜希子、阿部路子。(2) 102-108.

看護分野における混合研究法教育の国際的現状。河村洋子、抱井尚子、高木亜希子、阿部路子。(2) 110-118.

混合研究法を用いた看護研究支援ツール(m-STAR21)の開発と展望。亀井智子。(2) 120-124.

特集関連記事

Journal of Mixed Methods Research 収載論文「Crossover Mixed Analysis in a Convergent Mixed Methods Design Used to Investigate Clinical Dialogues About Cancer Treatment in the Japanese Context」。Taichi Hatta, Keiichi Narita, Kazuhiro Yanagihara, Hiroshi Ishiguro, Toshinori Murayama, & Masayuki Yokode. (2) 130-153.

〈From Author〉八田太一、成田慶一。(2) 129.

〈Comments〉Michael D.Fetters (訳・要約:成田慶一)、抱井尚子、亀井智子。(2) 154-156.

第3号

エビデンスを臨床実践に 活かす挑戦

JBIを契機とする臨床実践と研究者の協働

(企画:山川みやえ、植木慎悟、渡邊浩子、牧本清子、石丸美奈、増島麻里子、辻村真由子、西村直子、木村聡子、土谷僚太郎)

【1 EBPとは】

EBPとは——日本における現状と課題。渡邊浩子、山川みやえ、牧本清子。(3) 177-184.

【2 EBPに向けたシステムティックレビューの重要性】

2-1 なぜシステムティックレビューが重要なのか。山川みやえ、土谷僚太郎、木村聡子、西村直子、植木慎悟。(3) 186-197.

2-2 3大学の取り組みから考える
大阪大学の取り組み。古藤雄大。(3) 198-206.

千葉大学の取り組み。(執筆)石丸美奈、増島麻里子、辻村真由子、岩田裕子、田代理沙。(監修)森恵美、宮崎美砂子、酒井郁子。(3) 207-212.

大手前大学の取り組み。西村直子、木村聡子、土谷僚太郎。(3) 213-219.

2-3 大学院でシステムティックレビューを学ぶ必要性。植木慎悟。(3) 220-223.

2-4 ガイドライン作成のために
ガイドラインを作成する上でいかにシステムティックレビューが重要か。小林成光、増島麻里子、石丸美奈。(3) 224-230.

ガイドラインの作成において質的システムティックレビューのもつ意義。今野理恵。(3) 231-235.

【3 エビデンスを現場に実装していくために】

3-1 エビデンスを現場に伝えていくための「Recommended practice」——『JBI:推奨すべき看護実践』の執筆を通して。植木慎悟、大西舞子。(3) 237-242.

3-2 研究と現場との協働の試み
看護基礎教育におけるEBPの入門教育の必要性。木村聡子、西村直子、土谷僚太郎。(3) 243-245.

臨床家にとってのEBPの意味とは。辻村真由子、石丸美奈。(3) 246-248.

感染管理認定看護師との抄読会——EBPにおけるその役割。

内海桃絵. (3) 249–252.

【4 今後の展望】

エビデンスを臨床現場で活用し浸透させるためのタスク・フォース——日本のJBIセンターの役割. 山川みやえ, 石丸美奈, 西村直子, 植木慎悟, 増島麻里子, 辻村真由子, 木村聡子, 土谷僚太郎, 渡邊浩子, 牧本清子. (3) 254–257.

第4号

若手研究者が挑む

国際基準のエビデンス構築のための実験研究 徹底解説

(企画: 山上優紀, 大村優華, 植木慎悟, 『看護研究』編集室)

1. 実験研究の基礎知識. 山上優紀. (4) 277–281.

2. 看護学領域における実験研究の国際的動向. 山上優紀, 大村優華. (4) 282–291.

3. 実験研究に必要な要素. 山上優紀. (4) 292–298.

4. 解説: 実験研究を進めるプロセス. 山上優紀, 植木慎悟, 大村優華. (4) 299–306.

5. 【実験研究の研究事例】

5-1 実験研究の組み立て方——臨床での疑問を研究へ: スライディングシートを用いた体位変換の研究. 大村優華. (4) 307–315.

5-2 実験研究の連続性——エビデンスを積み重ねる意義: 温熱刺激の効果を調べる研究から静脈拡張時に用いる手技の効果を検証する研究へ. 山上優紀. (4) 316–325.

5-3 臨床での実験研究——臨床との関係性構築と研究手法の精練: 振動刺激による注射時の子どもの疼痛軽減をめざした研究. 植木慎悟. (4) 326–332.

6. 【座談会】知識ゼロからはじめた実験研究の経験と醍醐味. 山上優紀, 大村優華, 植木慎悟. (4) 333–341.

特集関連記事

投稿のための英文ジャーナルはこうやって探してみよう——研究成果を世界に広く発信するために. 植木慎悟. (4) 344–349.

第5号

国際学会におけるオーラルプレゼンテーション

そのヒントと経験

(企画: 池田真理, 『看護研究』編集室)

【翻訳】国際学会におけるオーラルプレゼンテーションのエッセンス. Alan Kawai Lefor / 池田真理(監訳), 中村美鈴. (5) 384–397.

International Conference Oral Presentation Essence. Alan Kawai Lefor. (5) 398–406.

初めての国際学会口頭発表で得た収穫と反省. 清水裕子. (5)

408–411.

国際学会におけるオーラルプレゼンテーションの経験と醍醐味. 高井ゆかり. (5) 412–415.

プレゼンテーション力を鍛える国際学会発表. 大城真理子. (5) 416–422.

EAFONS2021への参加とオーラル発表. 井上真帆, 武村雪絵. (5) 424–430.

【コラム】EAFONSの代表になって. 池田真理. (5) 431.

第6号

看護学研究の社会実装をめざして

インプリメンテーション研究と

データサイエンスへの期待

(企画: 仲上豪二郎, 『看護研究』編集室)

看護学研究の社会実装をめざして. 仲上豪二郎. (6) 464–466.

論文を通して学ぶ——看護学におけるインプリメンテーション研究. 須釜淳子. (6) 468–477.

リアルワールドデータとAIがもたらす看護研究のイノベーション——電子カルテデータを用いた褥瘡発生予測の研究を例に. 仲上豪二郎. (6) 478–486.

医療情報部門の実務者が伝えたい——電子カルテデータの取得と加工に役立つスキル. 横田慎一郎. (6) 488–495.

医療ビッグデータ概論——日本におけるビッグデータ研究の現状とこれから. 森田光治良. (6) 496–501.

医療ビッグデータ「NDB」「NDB オープンデータ」をどう活用するか——NDBを用いた研究例を含めて. 吉永尚紀. (6) 503–514.

特別記事

【修士・博士論文の出版の促進に向けた

日本看護科学学会和文誌・英文誌の取り組み】

『日本看護科学会誌』の取り組み——投稿のTipsを含めて. 宮下光令, 河野あゆみ, 春名めぐみ. (1) 43–52.

『Japan Journal of Nursing Science (JJNS)』の取り組み. 堀内成子. (1) 53–63.

ナラティブ分析への誘い——看護研究における可能性. 宮坂道夫. (1) 70–80.

キャリアヒストリー法の構築——看護職のためのヒアリングシートの開発. 池田雅則, 池田法子, 種村文孝, 犬塚典子, 柏木睦月, 渡邊洋子. (4) 352–367.

連載

集まる つながる 広がる 若手研究者のバトン

- 16 研究者としての自分を形づくった「奇跡」, 吉永尚紀, (1)1-5.
- 17 私の研究——精神科における shared decision making, 青木裕見, (2)85-89.
- 18 国を超え, 領域を超えて, 持続可能な社会のために研究に取り組む, 大城真理子, (3)167-171.
- 19 医療情報学分野で花を咲かせる, 横田慎一郎, (4)267-271.
- 20 運動器領域の看護実践へのこだわり東北という地へのこだわり, 齋藤貴子, (5)375-379.
- 21 1人ひとりの経験と見方を礎に, 私たちの倫理観の形成をめざす, 北尾良太, (6)455-459.

Ska vi FIKA ? スウェーデンでの研究生生活

- 1 スウェーデンに行くまで, 加藤尚子, (1)66-67.
- 2 日本と異なるスウェーデンの医療システム, 加藤尚子, (2)162-163.
- 3 看護教育と研究時間, ワークライフバランス, 加藤尚子, (3)260-261.
- 4 看護職のキャリア形成とライフイベント, 加藤尚子, (4)368-369.
- 5 移民の問題とコロナ禍が浮き彫りにした健康格差, 加藤尚子, (5)450-451.
- 6 スウェーデンの暮らし——日本との違い 日常編&職場編, 加藤尚子, (6)536-537.

Journal Club on Paper 看護研究に活かす 英論文をどう抄読し, 何を学ぶか

- 0 連載のはじめに 英論文抄読の意義とその進め方, 河野あゆみ, (5)434-439.
- 1 ICU看護師の職業性ストレスに対する教育プログラムの効果評価に関する無作為化比較対照試験(El Khamali et al, 2018), 松原みゆき, 河野あゆみ, (5)440-447.
- 2 地域高齢者におけるマルチモビリティ・パターン, フレイルと生存状況(Nguyen et al, 2019), 三浦剛, 河野あゆみ, (6)526-533.

若手研究者による若手研究者のための 英語論文執筆のTips

- 1 なぜ英語で研究成果を発表する必要があるのか, 植木慎悟, 山上優紀, (6)518-524.

西村ユミ, (1)40-41.

『定本 M-GTA——実践の理論化をめざす質的研究方法論』
「なるほど!」という理解とともにM-GTAと質的研究を学ぶ,
グレッグ美鈴, (1)65.

『みんなの研究倫理入門——臨床研究になぜこんな面倒な手続きが必要なのか』
なぜ研究倫理をわかりやすく説明できるのか, 清水哲郎, (2)158-159.

『定本 M-GTA——実践の理論化をめざす質的研究方法論』
自分自身の方法としてM-GTAを獲得する, 西村ユミ, (4)370-371.

『これで解決!——みんなの臨床研究・論文作成』
論文作成・論文採択の秘訣を学べる, 後藤温, (6)535.

書評

『ヘルス・エスノグラフィ——医療人類学の質的研究アプローチ』
フィールドで考え, 人びとの理解と自己変成を生み出す研究.